

年間第二十一主日

ヨハネ 6・60-69

2018.8.26

高円寺教会 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

遠藤周作は『沈黙』という小説の中で、宣教師ロドリゴが「転べば他の信者の拷問をやめる」と言われ、心を痛めながら踏み絵を踏んだとき、神の沈黙が破られ「踏むがいい」と語りかけられるのを感じた。その中で彼はイエスがユダに「しようとしていることをすぐにしなさい」と言われた言葉と同じものであることを思い出し、自分がユダと同じ立場にあることを自覚する。多くの人にはユダだけは赦されない罪人だと考えますが、イエスを理解できず去っていく人、イエスを殺そうと謀った祭司長や律法学者、「わたしには関係がない」と言ったピラト、それから「イエスを十字架につけろ」と叫んだ民衆も、神の子に対して罪を犯している。そんなイエスは仕返しをしようとは考えられず、「病人に医者が必要であるように、わたしは罪人のために来た」と言われます。普通に考えれば、自分に危害を加えた人や自分を裏切った人、馬鹿にした人が最終的には罰を受け、最後まで耐え忍んだ人のみが救われるべきだと考えてしまいます。でもイエスは自分に危害を加えた人をも救おうとされました。

このように神から与えられた全ての人を愛するイエスですが、そんなイエスに敵がいなかったわけではありませんでした。イエスには譲れないこともありました。「掟や組織など人間が作り出したものよりも、神を大切にしなければなりません」と言われますし、弱い人をいじめたりすることに対しては毅然とした態度で臨みました。イエスが人に愛されること、褒められることを望んだとすれば、みんなが喜びそうなことを嘘であっても言えばよかったと思います。でも「いつか朽ちてしまうものではなくて、永遠に無くならないもののために生きなさい」、そういった父のみ旨を曲げることはありませんでした。

キリスト者は罪を恐れる者ですが、私たちの理解する罪とは掟を守らないということではなく、永遠の命から離れてしまうことです。罪を犯して生きることとは生き方を楽にすると考えますが、滅びてしまうものに命を捧げる生き方となります。朽ちてしまうもののために生きること、それが罪の生き方ですからイエスは「永遠の命である神に立ち戻りなさい」と今も全ての人に向って語り

かけてくださいます。

人は神と共にいるのなら、永遠の命をこの世にもたらすことができます。人に優しくしたり、微笑んだり、自分の持っているものを人に分けたりするのは、単に朽ちるものを分かち合っているのではなく、永遠に残る大切なものを生きていると言うことができます。しかし、人のものを奪ったり、いじめたり、傷つけるような嘘をついてしまったら、犯罪でなくても滅びの道を歩むことになります。これらは永遠の命である神から離れてしまうような行為になります。すべての人は神に似せて創られたので、いつか朽ちてしまうこの世のものを手に入れても幸せを感じません。人はいつまでも無くならない信頼、寛容、喜び、愛といったものを実現しなければ、生きていることに喜びを感じることはありません。

イエスを裏切ったユダは、銀貨 30 枚を手に入れましたが、この世のものでは満足することなく、むしろ絶望を感じて自殺してしまいました。踏み絵を踏んだロドリゴは、死ぬまでキリストについて考え続けました。わたしたちも彼らと同じようにこの世のものと信仰の間で揺れ続ける者です。今日ご聖体を前にしたわたしたちも、「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧、あなたをおいて誰のところに行きましょう」（ペトロの信仰告白）と、聖体を前に宣言いたします。こうしてわたしたちはいつまでも無くならない命の糧を、日常の中にもたらすことができる人へと変えられます。永遠の命は死んでから手に入れるものではなく、またこの世において人々に分け与えることができることを信じ、心を込めてこのミサを捧げましょう。